

保護猫は招き猫

一年 熊谷柊生

僕の家には猫が二匹います。保護猫ですが、幸せを招く猫です。

二〇二一年十一月二十二日、家の雑木林で鳴いていた子猫を家に招きました。三日間親猫を求めて鳴いていました。親猫が来るのを待ちましたが雨が降り出したので猫を数匹飼っているご近所さんに来てもらうと、自分で動き回れない手の平サイズの子猫でした。動物病院に行くと生後二週間程度で二百グラム。ミルクのあげ方を教えてもらい、子猫はミルクを上手に飲み、これなら生きていけるかもしれないと獣医さんに言われました。妹が呼びやすくニャンと命名しました。子猫育てはご近所さんが協力してくれました。毎朝七時半にご近所さんの家へ連れて行き、午前中は夜勤明けのご主人が帰宅後ミルクを、午後はパートから帰宅した奥さんがミルクをあげてくれました。夕方六時頃仕事帰りに母が迎えに行き、翌朝までお世話をしました。離乳食が落ち着くまで約一ヶ月間こんな生活が続きました。お互いにニャンの様子が分かる様に授乳時間や排泄回数などを記録した交換日記は、今でも大切な成長記録です。初めての子猫育てと一緒にしてくれたご近所さん家族は、今も大切な猫仲間です。

二〇二二年九月三十日、ニャンのママ猫が近所的小屋で五匹の子猫を産み、瀕死で倒れていました。

小屋のご近所さんは、ニャンの姉猫を飼っています。小屋のご近所さんと一緒に動物病院に連れて行きました。ママ猫は原因不明で看取りのため家に連れて帰りました。子猫は目も開かない生後数日、三週間獣医さんが育ててくれ、離乳食から母と友人が育て里親に引き継ぎました。里親さん達とは今でも猫親戚です。

二〇二四年、五月二十三日、口を怪我した子猫が家の木のうろで鳴いていました。助けてと鳴いていました。急いで動物病院へ連れて行くと、口を火傷していました。生後二ヶ月程、怪我でご飯を食べられません。胃にチューブを入れ流動食を注入しました。母の友人で元動物看護師の支えがあり生きられたと思います。生きられてラッキーな猫と弟がラッキーと命名しました。七匹目の子猫育てなのでラッキー⑦で必ず元気になると信じていました。少しずつ口の怪我が治り、注入からシリンジ、スプーン、自力で食べられるようになりました。ラッキーはうちの二匹目の猫になりました。この夏休みニャンとラッキーはケージ越しで対面し、一緒に生活するために少しずつ慣れていきます。二匹とも親猫と逸れましたが、人と一緒に生きられて良かったと思っています。

獣医さん、ご近所さん、友人、多くの人の力があり今のうちの猫達がいいます。保護猫は人間が保護したのではなく、ご縁を導いてくれる招き猫です。人間だけの社会ではなく、動物にも優しい社会が続くと思います。

僕は二匹の猫を大切にしていきます。